

グループ紹介

彩とり会



彩とり会は、平成17年度（2005年度）生涯学習センターの手織中級講座の修了者で結成された同好会です。

手織りには、独特の深い味わいがあります。織り手の知恵と工夫と素材の持つ豊かさが一体となり、世界でたった一つのオリジナル作品が出来上がります。

織物は根気と忍耐のいる仕事なので、仲間で教え合ったり刺激し合ったりするなどして創っています。また、自分で工夫して新しい作品に挑戦することも楽しみの一つです。

私たちは、手織講座で基礎知識や基礎技術を学習しその魅力にとりつかれました。技術的にはまだまだ未熟ですが、自分で糸を染めたりデザインした図柄を綴織りにしたり、また織り上がった布を自分の洋服に仕立てたりして自分たちの個性を表現しています。

織機は生涯学習センターの講座で使用されるので、私たちは木枠やカードを利用するなどいろいろなアイデアを出し合ってタペストリーなどを作っています。時には手織りに関する話に夢中になっていることもあります。

現在メンバーは9人。ゆっくりゆったりいねいに、納得のいく作品を制作しています。そして、手織りの深さをもっともっと探求できたらと思っています。

私たちは、毎週木曜日、生涯学習センターきらめきのアトリエに集まっています。興味のある方は一度ご連絡ください。

連絡先 川又 澄子 643-6887

きらめき・ハーブ・茨木



私たちが使っているハーブは、楽器本体に楽譜を差し込んでつま弾くものです。考案者であるドイツのヘルマンさんが「ダウン症候群の息子にも演奏できる楽器を・・・」と10年以上の歳月をかけて創りました。

ハーブに初めて触れる方や何らかの障害がある方も簡単に演奏ができて十分に楽しめる楽器です。

私たちは、平成17年（2005年）に生涯学習センターきらめきで、このハーブの短期講座を受講し、そのやさしい癒しの音色にひかれて集まり、練習を始めました。そして多くの方に美しい音色を伝えようと5人のメンバーで演奏活動を始めました。

昨年の4月にはメンバーも増えて、12月には生涯学習センターきらめき1階エントランスで行われた「ランチタイムコンサート」でいっしょに演奏しました。

私たちは主に老人福祉施設で活動しています。演奏曲は、童謡や叙情歌、最近のヒットソングなどです。聞いてくださる方も演奏に合わせて口ずさんだり、中には弾いてみたいと言われる方もあり体験していただいています。その時、私たちはとてもうれしく幸せな気持ちになります。

私たちの夢は、高齢者や幼い子どもなど、すべての人といっしょに演奏することです。

皆さんも、私たちといっしょに演奏をしてみませんか。

連絡をお待ちしています。

連絡先 浜屋 富美子 627-0086
(茨木市社会福祉協議会 ボランティアセンター内)

市民インタビュー この人に会いたくて



第29回

茨木市民の中からいきいき生活の達人を探し出し、紹介するコーナーです。話から見てくるその豊かな人生に、あなたもきっと勇気づけられることでしょう。

西洋古典鍵盤楽器のコーディネーター
井岡 妙さん

ベルギーの音楽祭でチェンバロの音色に強くひかれ、日本での普及を思い立つ。大学などで西洋鍵盤楽器とその和声の講義を担当し、現在は普及活動と共に西洋古典鍵盤楽器にかかわるコーディネーターも行っている。

チェンバロなどの鍵盤楽器について教えてください。

モーツァルトの時代（18世紀後半）、ピアノはまだ現在のようなものではなく、フォルテピアノと呼ばれていました。チェンバロは、それ以前の17、18世紀初期のバロック音楽隆盛期からヨーロッパ各地でクラヴィコードと共に盛んに演奏されていました。これらの鍵盤楽器の総称をクラヴィーアと呼んでいます。

チェンバロは、鍵盤を押すことでジャックの先についている爪のようなものが弦をひっかけて音を出します。国や地域によって呼び名が違い、イタリア・ドイツではチェンバロ、イギリスではハーブシコード、フランスではクラヴサンと呼んでいます。ピアノより力を必要とせず、それほど技量がなくても十分に楽しめます。宮廷で用いられていたことから、チェンバロの音響板の上や上ぶたの内側には、宮廷風の装飾が施されています。

チェンバロとの出会いを教えてください。

妹（井岡みほさん：チェンバロ・フォルテピアノ奏者）がドイツに音楽留学し、ピアノとチェンバロを専門に勉強していました。私がそこへ訪ねていった時、たまたま近くのベルギーで行われていたチェンバロのフェスティバルで演奏を聴き、その音色に強くひかれ、チェンバロにかかわる仕事がしたいと思いました。いつもピアノで聴いていたバッハやモーツァルトの音楽が、チェンバロやフォルテピアノで聴くとまるで違った雰囲気を醸し出しているのに驚きました。

当時の音楽は、主にどのような所で演奏されていたのですか。

16・17世紀と18世紀初期は、宮廷のサロンや富裕層の家で演奏されていました。多くは主人の気に入った音楽を演奏していました。バッハもチェンバロ、クラヴィコード、オルガンを使って演奏していました。

このような鍵盤楽器がやがてピアノに変わっていったのはなぜですか。

音楽の大衆化が大きな要因ではないでしょうか。

人々が音楽に求めるものが時代と共に変わっていき、それに従って音楽様式も変わっていきました。宮廷のサロンなどでの演奏から劇場などのより大きな空間での演奏に変わっていくと、チェンバロなどの音量では隔々まで届かなくなり、よりダイナミックな音が出るピアノへと変わっていったのだと思います。

チェンバロなどの代表的な作品を教えてください。

バッハの「ブランデンブルグ協奏曲」・「フランス組曲」、クーペランの「クラヴサン曲集」、ラモアの「コンセール形式による曲集」などです。どれも心が洗われるような曲です。

今までの活動で印象に残っていることは何ですか。

私は、何種類もの鍵盤楽器を持っているので、世界的な演奏家がそれらの楽器を弾きに、私の所へやって来ます。そのような世界的な演奏家と出会い、話をしたひとつひとつが心に残っています。また、その方たちの演奏も印象的です。私は、演奏にはその人の考え方や生き方などが表れると思っています。

井岡さんにとって「生涯学習」とは何ですか。

私たちは、学校を卒業すると「学習」することが少なくなります。しかし、自分の仕事に関係があるものでも、まったく仕事に関係がなく楽しめるようなものでも、何か一つ、自分の興味のあるものを見つけて「学習」してほしいですね。どこで自分の才能を発見できるかわからないし、そこでの人との出会いが人生の可能性を広げてくれるかもしれません。とにかく、前向きに学んでいくことです。



チェンバロの構造について説明する井岡さん